

助辞「とて」の成立過程・意味用法をめぐって(一)

森 脇 茂 秀

0、「とて」に於ける問題点の所在

古代語「とて」は特殊な場合を除いて、現代に於いては用いられることはないが、「とて」の語形変化により生じたときれる「つて」は頻用されている。そして、古代語「とて」は引用節に承接するため、その引用節には制限がないと考えがちであるが、「とて」の語形変化より生じた現代語「つて」には承接の制限が存しているのである。

例えば、

・学校へ行つたつてもう遅い。

などは成文であるのに対して、

・*学校へ行くつてもう遅い。

は、非文となる。これは「つて」の承接語が、過去形あるいは完了である場合は成文となり、現在形は非文となることを意味していると考えられる。では、翻つて、中古の「とて」には上接語の制限はあるのであろうか。また、「とて」の上接語には偏在が存するのであろうか。

次に「とて」自体の語構成について考えてみる。元来、「とて」は、「と」と「て」の所謂複合助辞である。ところが、「て」は活用語の連用形しか承接しないのであるから、「とて」は「て」についてみると、例外ということになる。例外であるならば、「とて」成立の特殊性が想起され、当然問題になると思われる。

更に、「とて」は史的、文献的な偏在を見せる。上代には一例を除いて確例を見出すことができないのに対して、中古以降、頻用されるようになる。また、「とて」が和文に、「として」が漢文訓読文に用いられ、お互いに相補的に分布するという指摘がある。これはどのようなことを意味しているのであろうか。

意味用法に関して、「とて」は後世に逆接用法が増加し、順接用法は衰退する、という指摘がある。現代語の場合、「とて」が用いられるのは特殊であると述べたが、仮に用いられる場合、古語性が強く、またそれは逆接用法しかない。つまり「とて」は意味用法が史的に変遷しているのであって、この変遷過程を考察する必要があると思われる。本稿に於いては中古に於ける「とて」の意味用法に重点を置き考察を試みる。以上、これらの問題点について考えて行くことにしたい。

1、「とて」の成立時期

「とて」は、上代には確例が一例のみ存在するだけである。このことは既に山田孝雄博士が次のように指摘しておられる。^①

「と」より直に「て」につゞけて「とて」といへること当時の文献には見えず。唯一鎮火祭祝詞に見ゆるのみ。(略)これを以て見れば、或はこの祝詞は後世の改刪を経しものかもしれず。

その用例は、次のものである。

・此七日（撰） 不足（匹） 隠坐事奇（出） 見所行時 火（平生） 給（与）
御保止（手） 所焼坐（支）

（この七日には足らずで、隠ります事奇しとて見そなはず時に、火を生みたまひてみほとを焼かえましき。428p）

この鎮火祭祝詞の用例は「足らずで」と打消の助動詞「ず」と「て」が直接承接して「ずて」という語形である点も注目されるが、それと相応する形で、「とて」は形容詞「あやし」と承接しているのである。上代には確例がこの一例のみであることに對して、一つには山田博士が説くように「改刪」されたのではないかという疑問も成り立つであろう。つまり、上代には「とて」は存在せず、文献には表れない、とする考えである。また逆に、「とて」は既に上代に潜在していたが、何らかの原因で文献には表れなかった、しかし、鎮火祭祝詞の用例は積極的に「とて」を受け入れた、とする説も成り立つであろう。

では、この二説に對し、中古に於ける「とて」の用例分布を検討し、また「とて」の成立過程を考察することによっていずれの説を支持すべきであるかを考察することにする。

まず、「とて」の中古仮名文学作品に於ける用例数を表にして示すところのようになる（表Ⅰ）。

表Ⅰを見るに「とて」はいずれの作品にも表出しており、中古初期の作品群『竹取物語』『古今和歌集』『伊勢物語』に於いて和歌中

表Ⅰ

作品名	用例数
竹取物語	42
古今和歌集	21
伊勢物語	55
土佐日記	19
平中物語	77
落窪物語	373
蜻蛉日記	289
大和物語	65
三宝絵詞	28
枕草子	218
堤中納言物語	65
源氏物語	1134
紫式部日記	24
栄華物語	464
浜松中納言物語	136
更級日記	35
狭衣物語	346
大鏡	174
計	3568

に用いられていることが分かる。また同様に中古初期の『新撰万葉集』に五例「とて」を見出すことができる。

・恋すれば我が身ぞかげとなりけるさりとて（砥手）人にそはぬものぬゑ（新撰万葉集・古今集 十一 恋一 528）

・御心はさらにたち帰るべくも思されざりけれど、さりとて夜をあかし給ふべきにあらねば帰らせ給ひぬ。（竹取物語 57p）

・今はとてわかるゝ時はあまのかはわたらぬさきに袖ぞひぢぬる（古今集 四 秋上 182）

・今はとて天の羽衣きるをりぞ君をあはれと思ひいでける（竹取物語 66p）

まず着目すべき点は、「とて」が中古初期の段階から和歌に用いられていることである。語形の成立と共に速やかに和歌に表れるとは考え難く、和歌に採用されるまでの使用度を想定するのが自然であろう。

同時期に、しかも多数の用例を見出すことが、それを証明していると思われる。但し、『古今和歌集』の左注に44例、また会話文中に用例が存することから、文献に表れた初期の段階に於いては「とて」は十分に口頭語的性格を反映していると思われる。従って「とて」の成立時期は『竹取物語』『新撰万葉集』以前を想定すべきであろうと思われる。

次に、後に接続詞として表れる「さりとて」が、中古初期の作品群中から表れていることである（表Ⅱ）。

この「さりとて」が初期作品群から見出されるということは「とて」が「さり」と結び付く以前に、十分なる交渉を想定しなければならぬ。

「さり」は存在詞であり、本来、超時間的であるが、「とて」初出例の鎮火祭祝詞の用例の承接語は「あやし」という形容詞であり、この形容詞も超時間的であるということを考え併せると、「さり」と「とて」

「形容詞プラスとて」の共通性を指摘できる。

さらに、第三には前例の「今はとて」、また「いつとて」等の慣用句化する語も中古初期作品から見出すことができ、文献に表れる以前に

〈表 II〉

作品名	用例数
竹取物語	1
古今和歌集	1
伊勢物語	2
土佐日記	—
平中物語	1
落窪物語	1
蜻蛉日記	1
大和物語	—
三宝絵詞	—
枕草子	2
堤中納言物語	1
源氏物語	36
紫式部物語	2
栄華物語	22
浜松中納言物語	16
更級日記	2
狭衣物語	14
大鏡	8
計	109

「とて」との交渉を想定し、慣用句化したと考えなければならぬ。これは、文献に表れる初期段階から「とて」の使用頻度が高いことを意味していると考えられる。

以上、「とて」の成立時期は文献に表れるよりもかなり以前、すなわち上代から成立していたと想定できるのではないかと思われる。さすれば、鎮火祭祝詞の用例は「後世の改削」と見るよりも、宣命、祝詞といった伝統のなかで胎生していたものが萌芽した結果として文献に表れた、「とて」の初出例である、と積極的に認める蓋然性が高いのではないだろうか。また、そのような前提を構築できれば、「とて」の潜在したと思われる上代には、「とて」成立過程を示唆するものが存していると思われる、また平安初期から文献に表出するという点にも、何らかの必然性が存するはずである。

2-0、「とて」の成立過程

そこで、上代の「とて」成立の要因を探るために「と」の連用修飾用法に着目し、調査した。そのために上代の「と」と、中古の『源氏物語』中の「と」とを比較、対照することにより、史的な観点も考慮しつつ、その類似点、相違点を明らかにするように努めた。その結果を踏まえて、「とて」成立の過程を考察することにした。

2-1、上代、中古の「と」の用法

富士谷成章の『あゆひ抄』によると「と」の用法に「と思ふ」「と言ふ」「と見る」「と聞く」「となる」の五形式を挙げている。また、吉田金彦氏は、上代では「と思ふ」「と言ふ」「と見る」の三形式が代表的なパターンである。

と指摘しておられる。『万葉集』の「と」を詳細に調査した小路一光氏は「と」の連用格用法862例中、発話(言ふ等)・思惟(思ふ等)の内容を示すものは551例で64%を占めることを指摘しておられ、これらの指摘は「とて」の成立過程を考えると、極めて有効である。一方、「とて」が隆盛を極めた『源氏物語』のなかで「橋姫」「椎本」の「と」の用例を調査した結果、次のようになった。

		橋姫						椎本					
	語	用例数	%		語	用例数	%		語	用例数	%		
書く	思ふ	2	60	1	思ふ	3	70	なし	思ふ	1	1		
見る	言ふ	8	36	6	言ふ	13	40	あり	言ふ	3	2		
聞く	思ふ	9	25	6	思ふ	6	26	頼む	思ふ	5	4		
書く	思ふ	1	42	6	思ふ	7	45	なし	思ふ	1	1		
見る	言ふ	8	25	6	言ふ	13	40	あり	言ふ	3	2		
聞く	思ふ	9	25	6	思ふ	6	26	頼む	思ふ	5	4		
書く	思ふ	2	60	1	思ふ	3	70	なし	思ふ	1	1		
見る	言ふ	8	36	6	言ふ	13	40	あり	言ふ	3	2		
聞く	思ふ	9	25	6	思ふ	6	26	頼む	思ふ	5	4		
書く	思ふ	1	42	6	思ふ	7	45	なし	思ふ	1	1		

『万葉集』と『源氏物語』との「と」の用法を比較すると、『源氏物語』では被修飾語句が複合動詞、待遇表現などの多様性を見せているものの、「と思ふ」「と言ふ」を基本にして大なる相違は見受けられない。この両形で全体の約七割を占めているからである。

このことを先行説を踏まえて判断すると、「と」に下接する、或いは、「と」が修飾する「言ふ」「思ふ」が、「とて」の省略された用言を示しているのではないかとする仮説が生じる。この仮説を証明するには「といふ」形、「とおもふ」形が「とて」の意味用法と如何に結び付くかを実証する必要があるため、それを考察することによって「とて」の成立過程を考えてみことにする。

2-2、「といふ」の用法

まず、「といふ」形について。この形は既に上代から「とふ」形・「ちふ」形を産出していることが注目される。このことは「といふ」形が「とふ」「ちふ」形を産出するまでに頻用されたことを物語っていると思われる。但し、上代、特に『万葉集』の場合、和歌という特殊性、即ち字余り等の音数律の問題に過ぎないのではないかとという反論があるかもしれない。しかし、「とふ」「ちふ」両形は句頭に表れることがないのであり、音数律の条件下のみに表れるとする説は否定できるのではないかと思われる。

さて、この「といふ」は、

・昔こそ難波田舎といはれ(跡所言) けめ 今は都引き都びにけり
(万葉集 三 312)

のように「いふ」に対して明確なる主語が存在しない例も見出される。この用例は発話という実質の意味が形式化してしまったものがある。これを本稿では「提示」と仮称する。

・うへに待ふ御猫はかうぶり給はりて命婦のおとどとて、いとをか
しければ、(略) (枕草子 七段)

この用例中の「とて」も形式化した「提示」の意と考えられ、「といひて」と同質のものである。また、「といふ(とふ)」形には、

・愛子 吾背の君 居り居りて物にい行くとは 韓国の 虎とふ

(二云) 神を生取りに(略)

(万葉集 十六 3885)

・沖つ鳥 鴨とふ

(云) 船の還り来ば 也良の崎守 早く告げこそ

(万葉集 十六 3866)

のように、「AといふB」(「虎といふ(とふ)神」「鴨といふ(とふ)船」)が存している。これは指定の助動詞「なり」と近似の性質を有しており、時枝文法では「と」自体に指定の意を見出したのだが⁸⁾、むしろ、指定の意は「といふ」形中に存していると考えるべきであろう。そうすると、

・起きもせず寝もせず夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ

(古今集 十三 恋三 616)

のような「名詞プラス『とて』で指定の意を表すものも「といふ」の用法中に含めて考えることができる。つまり、「と言ふ」形の「発話」という実質の意味が、「とふ」形「ちふ」形を産出するまでに頻用され、「提示」(若しくは指定(認定))という意味に形式化したことによつて言語主体の抵抗感が薄れ、「とて」に於いて省略が可能になったと考えるのである。例えば、「として」の背後には「とす」が存在したように「とて」成立の背後には「といふ」が存在した、と考えるのである⁸⁾。このように言語主体の抵抗感を勘案すれば、まず「とて」の成立には意味の形式化した「といふ」が想定されるであろう。しかし、「とて」には発話という実質的な意味を有するものも少なくない。

・(略) 公事どもありければ、え侍はで夕暮れにかへるとて、
忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは

とてなむ泣くく来にける

(伊勢物語 83段)

この用例は、主体である業平がその場を立ち去らなくてはならなかったため、和歌を詠み、泣く泣く帰って来た、という場面であるが、そのなかで和歌を承ける「とて」について見ると、この帰る場面で対者である親王を目前にして主体である業平が何も行爲を行わないのは不可解である。この「とて」は、和歌を詠み上げる、つまり、「発話」

という実質的意味を表していると思われるべきであろう。また、実質的な意を表しているものは明確なる主体（ここでは業平）が存しており、「提示」とは異なっている。

以上のことから、「とて」の成立過程には二元的な成立が考えられる。一つには、意味の形式化した「いふ」、またもう一つには実質的な意味を有している「言ふ」である。つまり、

「といひて」→「とて」（「とふ」「ちふ」のように意味形式化）
「と言ひて」→「とて」（実質的意味を保有）

ということになる。

2-3、「とおもふ」の用法

次に、「とおもふ」について。「とおもふ」も「といふ」が「とふ」「ちふ」形を産出したことと同じく、「ともふ」という形が上代に見られる。

・また歌ひ給ひしく、(略)

真代には真玉を掛け 真玉なす吾がもふ (母布) 妹

鏡なす吾がもふ (母布) 妻 (略)

かく歌ひて、即ち共に自ら死せたまひき。かれこの二歌は読歌な
り。(古事記歌謡九十 90・91ペ)

この「もふ」は『万葉集』にも見られ、句頭に立つことはない。しかも、「歌ふ」場面に用いられていることが示唆的である。この「歌ふ」場面に用いられているということは「とおもふ」「ともふ」が頻用されたことを示唆していると考えられるからである。この「とおもふ」形は「といふ」と同等の用例数があり、この「おもふ」「いふ」同

様、「とて」の省略された用言と考えられるであろう。従って、「とて」の省略された用言とは、「いふ」「おもふ」二語が該当すると思われる。

2-4、「とて」と引用形式

では、「とて」の省略形である、発話である「いふ」と、思惟である「おもふ」とは如何にして、識別されていたのであろうか。

この問題は「とて」の「と」に關係していると思われる。つまり、日本語の引用構造と併せてみるのである。「引用」について、奥津敬一郎氏は、次のように指摘しておられる。

日本語の引用構造は、「N₁ガN₂ニストV」のように地の文の引用動詞(V)に対して、その動作の主体である名詞(N₁)と格助詞の「ニ」をとって聞き手を表す名詞(N₂)と、引用の格助詞「ト」に従われる引用文(S)とから成る。(国語学大辞典 56ペ)

この日本語の引用構造の指摘は「とて」を考えると極めて有効である。つまり、「いふ」「おもふ」の相違は、N₂(聞き手・対者)の有無によると考えられるのである。例えば、

・男もすなる日記といふものを女もしてみんとてするなり。

(土佐日記 27ペ)

であれば、自己の心中思惟であるからN₂(聞き手・対者)を必要とせず、『伊勢物語』の用例であれば、「業平」というN₁(主体)がまず想定され、和歌を聞く対者である「親王」N₂が表出するのである。つまり、「とて」は「場」に存在する言語主体によって、如何なる用法かが決定されるのであり、極めて「場」依存度が高いと言えよう。この関係を纏めて示すと次のようになる。

《日本語の引用構造》

「N₁ ガ N₂ ニ S ト V」

・ 対者 (N ₁) が存在する	「とて」	↓	「といひて」
・ 対者 (N ₂) が存在しない	「とて」	↓	「とおもひて」

3、「とて」の位相

築島裕氏は「とて」について、次のように指摘しておられる。⁸⁾

訓読特有語の中には不必要と思はれる程に形式的な接尾語や形式語を添へ用ゐる例がある。(略)又、「……クテ」「……ニテ」「……トテ」「……デ」と言はずに、「……クシテ」「……ニシテ」「……トシテ」「……ズシテ」と言ふことなどがその例である。かやうにことさらに接尾語や形式語を加え用ゐるのは恐らく訓読で一字一字を入念に逐語的に訓み続けて行つた結果と見て良いのではないか。

ここで、問題となるのは補読の問題である。「し」が表記されていない場合をもすべて「として」と補読するのであるが、果たして「とて」の存在を漢文訓読中で否定する根拠は何であろうか。しかし、一方での漢文訓読で「とて」の確例を見出そうとする場合、補読の可能性をすべて否定することは困難のように思われるため、本稿では「とて」を仮名文中に表れる「和文語」、「として」を漢文訓読に表れる「漢文訓読語」と規定して考察することにする。⁹⁾

ところで、その漢文訓読中の「として」については、既に春日政治氏が種々相を指摘しておられる(要約して示す)¹⁰⁾

(1) 動詞、助動詞を承けるもの

(トスの上接語の)動詞はすべて未来の助動詞ムを伴ふものである。

しかし稀に現在形を以てするものがある。(略)この現在形を受けるものは「……トシテ」といふ接続形には多く見えるが、他の形には極めて少い。意味にはさして異なりはないやうである。このトスは多く意欲を表すものであつて、「……セムトオモウ」といふ義であつて、(略)トオモフと同じである。しかし又単に将然を表す場合もある。自然にかならうとする義である。

(2) 体言を承けるもの

体言にトシテをつゞける一類があるが、これは体言をタリで指定するものの接続形である(略)トアリテと訳するほうが妥当である。即ち「何タル資格ヲモツテヤテ」の義である。

春日氏は(1)「せむとおもふ」(2)「とありて」のように「として」を峻別し、活用語を承ける場合と名詞を承ける場合とは「と」の品詞が相違すると指摘しておられる。「とて」についてはコメントされてはおられないのであるが、「とて」を考察する上でも示峻に富む指摘である。では、春日氏が指摘された漢文訓読語「として」の用法と比較しつつ、仮名文中に表れた「とて」の用例を考察することにした。

4-1、古今和歌集中の「とて」

『古今和歌集』に用いられた「とて」の引用節中で承接する語句、被修飾語句を表にして示すと次(次ページ表)のようになる(ハ表III)。

「とて」の引用節中の承接する語句を見ると、「物」、「事」等の名詞、「今は」等の「名詞プラス助詞」のように固定的、状態的であることが分かる。また、漢文訓読語「として」との相違点として「あけぬ」「老いぬ」と完了形に代表される、既に事柄が顕在化してしまつたもの(これを「既然」と仮称する)を承ける用例が存する点である。

III <表>

引用節	被修飾語句	引用節	被修飾語句
ちらず	きても見なくに	そゑに	とすれば
こえじ	かへりにし	いのち	たのむにかたければ
あくや	わけゆれば	こふ	物ぞ思ふ
いつ	あらねども	こふ	なげきつる哉
思ふ事	ないひそ	つかふ	かえりみもせぬ
今は	わかるる	さり	そはぬものゆゑ
今は	かへす	しかり	そむかれなくに
今は	うつろひにけり	あけぬ	今はの心つくからに
今は	かれなば	あけぬ	かへす
春の物	ながめくらしつ	老いぬ	せめぎけん
かたみ	とゞめけめ		

そのような中で問題となるのは、動詞終止形を承けている場合である。

〔用例1〕 ゆふぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまそつらなる人をこふとて

〔用例2〕 つれなき人をこふとてやまびこのこたへするまでなげきつるかな

〔用例3〕 古歌奉りし時の目録その長歌 貫之

(略) ひさかたのよるひるわかずつかふとてかへりみもせぬ我が宿のいたまあらみふる春雨のもりやしぬらん

(十九 雑体 1002)

〔用例1〕は倒置されているが「天上に住むような(とて)も手の届かない」人を恋している」ので「物ぞ思ふ」のであり、「用例2」も「私の気持ちの応えてくれない人を恋していて」「なげきつる」のである。このように「用例1」「用例2」は現在の心的状態を表していると考えられる。「用例3」は「見すると「つかふ」という動作性動作を表しているように見えるが、被修飾語句「かへりみもせぬ」「かへりみる」

という動詞は心理を表現する動作であるから、その修飾関係からすると「用例1」「用例2」と同一であつて、「用例3」「つかふ」も心理動作を表していると思つてよいのではないかと思われる。但し、「用例1」「用例2」との相違点としては、「用例3」が「仕えよう」として「かえりみなかつた」という「意志」を表現するものと同質の性質を有していることであり、注目される。この意志を表現するということは、現在の終止形という活用形体に内在しており、それを効果的に表現したものと思われる。この「とて」は漢文訓読中の「として」と「時」の面で、和文中の「として」とは「動作性」の面で相違し、その引用節は、状态的、固定的であつて、動作を表現する「用例3」は心的状態のみならず、意志をも表現するのである。

〔用例4〕 僧正遍昭によりておくりける 惟喬親王

桜花ちらばちらなむちらずとてふるさと人のきてもみなくに

(二 春歌下 74)

〔用例5〕 心地そこなへりけるころ、あひ知りて侍りける人のとはで心地おこたりて後、とぶらへりければよみてつかはしける

藤原高経朝臣女兵衛

死出の山ふもとを見てぞ帰りにしつらき人よりまづこえじとて

(十五 恋歌五 789)

〔用例6〕 「は」をはじめ「る」をはてにて「ながめ」をかけて時の歌読め」と人の言ひければ読める 僧正聖宝

はなのなかめにあくやとてわけゆれば心ぞとみにちりぬべらなる

(十 物名 468)

〔用例4〕は打消の助動詞「ず」、〔用例5〕は打消意志の助動詞「じ」〔用例6〕は疑問の係助詞「や」を「とて」が承けている例で、これは後続の被修飾語句に対して事柄がまだ顕在化していないこと(これを「未然」と仮称する)を表していると考えられる。これは「用例3」との対照において未確定要素が強く、また「用例3」は意志という未

来（将来）を意味するものであったが、これは現在の状況により生じる心的態度であるという相違点が認められる。つまり、「用例5」は打消意志の「じ」を表現することで、その動作主体の心理を明確に表現するのに対して、「用例3」は現状を描くことよって表出してくる動作主体の心理を表現効果として意味するという違いである。

「用例4」は「散らないからといって来て見もしないことだ」と解釈できようが、この用例は被修飾語句に「…も…否定」を伴っており、逆接用法であることに注意したい。ここでは「とて」の省略形として意味の形式化した「いふ」が想定できるであろう。逆接の用例は既に『古今和歌集』に於いて和歌に歌語として認定され、また、その省略形として形式化してしまい、△本来の発話の意を有していない「いふ」であったVのである。

また、前述した「既然」を表す「とて」は三例存している。

「用例7」 藤原国経朝臣

明けぬとて今はの心つくからになど言ひ知らぬ思ひそふらむ

(十三 恋三 638)

「用例8」寛平の御時きさいの宮の歌合のうた 敏行朝臣

明けぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそぼちつ、

(十三 恋三 639)

「用例9」おなじ御時のうへのさぶらひにて、をのこども大御酒た

まひて大御遊びありけるついでに仕うまつる 敏行朝臣

老いぬとてなかわが身をせめぎけん老いずは今日にあはまし

ものか (十七 雑歌上 903)

「用例7」「用例8」「用例9」は事柄が既に顕在化してしまつたことを示す完了の助動詞「ぬ」を伴っており、引用節を既然と仮称するわけであるが、ここでも「とて」の省略されたものは「用例4」と同じく、意味の形式化した「いふ」であり、事柄を提示する用法である。

「用例10」恋すれば我が身は影となりにけりさりとて人にそはぬも

のぬゑ

「用例11」 小野篁朝臣

しかりとてそむかれなくに事しあらばまづ嘆かれぬあなう世中

(十八 雑下 936)

「用例10」「用例11」は存在詞「さり」「しかり」を「とて」が承けたもので、被修飾語句に否定語を伴つて、逆接となつている。特に「用例10」に代表される「さりとて」は△表II Vの如く、後世、接続詞として頻用されており、これらのものも事柄を提示する用法であつて、意味の形式化した「いふ」と考えられる。

次に、名詞、名詞プラス助詞を承ける「とて」について。漢文訓読語「として」は資格を表すとされたが、一方「とて」の場合、他の動詞、助動詞を承けるものと識別する必然性は感じられぬように思う。

「用例12」(略)「親のよぶ」といひければ、いそぎかへるとて、裳をなんぬぎおきて入りにける (略) 興風

あふまでの形見とてこそとゞめけめ涙にうかぶもくずなりけり

(十四 恋四 745)

「用例13」そゑにととてすればかゝり かくすればあな言ひ知らず

あふさきるさに (十九 雑躰 1060)

「用例12」では名詞「かたみ」を承けているが、ここでは意味の形式化した「いふ」の省略で指定の意と考えられる。そうすることで下接する「こそ」の強調的提示により、逆接が効果的に表現されているのである。また「用例13」の「そゑに」は「それゆゑに」の省略形と考えられ、同様に実質の意味の形式化した「いふ」の省略と考えられる。

更に、△表III Vから「とて」の被修飾語句は、「言ふ」「思ふ」等、「と」と同様のものも存しているが、「とて」は「と」に比して多様性を見せており、ここからも「と」と「とて」の相違、ひいては「とて」に於ける省略された用言の存在を傍証することになるのではないかと

思われる。

〔用例14〕 よみ人しらず

今はとてきみがかれなば我がやどの花をばひとりみてやしのば
ん (十五 恋五 800)

〔用例6〕 花のなかめにあくやとてわけゆれば

〔用例13〕 そゑにとてとすれば

〔用例14〕 の被修飾語句は仮定条件である「未然形プラス『ば』」、
前出の「用例6」「用例13」は確定条件である「已然形プラス『ば』」
である。これらの用例は「とて」により引用された節と被修飾語句と
は一句として条件法を表現するということであり、この関係を纏めて
示すと次のようになる。

引用節	と	被修飾語句
(未然／現在の状態／已然)	て	(仮定／確定)

以上、「古今和歌集」の「とて」は、「として」と比較すると、「已然」
を表すものがあり、漢文訓読には見られなかった独自の用法を有して
いる。また、省略されたものは意味の形式化した「いふ」が多用され
ており、発話という実質的な意味が存しないことも特徴であると言え
よう。また、逆接を表現する用例も既に存しているということも指摘
しておきたいと思う。

4-2、土佐日記中の「とて」

『土佐日記』の中の「とて」の引用節、被修飾語句を表にして示す
と次のようになる。(表IV)。

表IVから分かるように『土佐日記』中では、「むとて」形が19

<表 IV>

引用節	被修飾語句	引用節	被修飾語句
みん	するなり	このむ	あるにもあらざるべし
いなん	さわげば	よむ	よめりける
おはん	こぎいでけり	奉る	うちはめつれば
みおくらん	追ひ来ける	もこそし給べ	つゝめきて止めぬ
せん	おりてゆく	よのま	さしはさめりければ
せん	奉る	人もいふこと	いへる
つかはれん	つきてくる	今は	見えざる
よまん	もとめける	うちは	追ひ来る
やらむ	置かれぬめり	いひつるかな	かきいだせれば
まからず	たちぬる		

例中9例用いられており、一特徴を示している。

〔用例15〕 男もすなる日記といふものを女もしてみんとてするなり。
(略) そのよし、いさゝかものにかきつく。
(十二月二十一日 27ペ)

『土佐日記』の作者紀貫之は『古今和歌集仮名序』などに見られる
ように、通常、漢文で書かれるべきものであった公的文章を仮名で記
しており、貫之の仮名文に対する強い愛着を窺い知ることができ
る。

さて、「用例15」は貫之(作者)を女性に仮託した冒頭部分としてあ
まりにも有名な箇所であるが、ここではまず「日記といふもの」と、
提示の意の「いふ」を用い、それに対応する形で「女もしてみんとて
するなり」と「とて」が用いられている。この「とて」には「思ふ」
という省略語が想定できる。というのは、「日記といふもの」の「いふ」
に対しては、明確なる動作主体が存しないのに対して、「みんとおもひ
て」と想定すると、そこには女性に仮託された作者である貫之の姿が
明確に存在し、しかも、作者自身の意志を示す「む」を引用節の中に
含むことによって、聞き手という対象を必ずしも必要としないと思わ
れるからである。このように考えられるならば、この「用例15」の「と

て」はその動作性を敢えて潜在化させることによって、表出してくる動作主体である貫之に重点を置いた表現として捉えることができるであろう。

〔用例16〕おぼろげの願によりてやあらん、風も吹かず、よきひいできてこぎゆく。このあいだにつかはれんとてつきてくるわら
はあり、(略) (一月二十一日 43ペ)

〔用例17〕(略) かちとりもののははれも知らず、おのれし酒をくらひつれば、はやくいなんとて、「潮みちぬ。風も吹きぬべし。」
とさわけば、舟に乗りなんとす。(十二月二十七日 30ペ)

〔用例16〕は「とて」の主体を引用節では述べず、被修飾語句で「わらは」と明示させ、〔用例17〕では「かちとり」という主体の心理を「とて」が受け、動的動作として「さわぐ」のである。つまり、〔用例15〕〔用例16〕〔用例17〕に代表される「むとて」は、「とて」の省略された用言に対応して表出してくる動作主体に重点があり、と同時に心理をも表現するのである。〔用例17〕の「乗りなんとす」は「乗ろうとす」という動的動作を表すのであり、「とて」とは対照的である。しかもこれらの「とて」は作者の視点から描かれており、日記という形態上からも、注目される。また、これらの「むとて」は漢文訓読であれば「むとして」とあるべきところであろうが、『土佐日記』中の「して」を調査してみると「として」は一例のみで、「むとして」という語形は存しない。このことから貫之が仮名文ということ意識して「とて」を用いたことが窺えるのである。

さて、動詞終止形を承ける「とて」は三例存している。

〔用例18〕これを見て、むかしのこのは悲しきにたえずして、なかりしもありつゝかへるひのこをありしとなくてくる悲しきと言ひてぞ泣きける。ちちもこれをきゝて、いかゞあらん。かうやうのこともうたも、このむとてあるにもあらざるべし。

(二月九日 55ペ)

〔用例19〕これを見てぞ、仲麻呂の主、「(略) わかれをしみ、よるこびもあり、かなしびもあるときにはよむ」とて、よめりけるうた、あをうなばらふりさけみれば春日なる三笠山に出でし月かもとぞよめりける。(二月二十日 42ペ)

〔用例20〕また、いふにしたがひて、いかがはせんとて、「まなこもこそふたつあれ。たゞひとつある鏡をたいまつる」とて、うみにうちほめつれば、くちをし。(二月五日 52ペ)

〔用例18〕は、任国の土佐で亡くなった娘へ追慕して歌を詠んだ妻が泣き、貫之が更に亡き娘への追慕を深め、歌を詠むということについてコメントしている場面である。〔用例19〕は亡き娘への追慕という『土佐日記』の執筆動機、また貫之の歌論を主張している場面で、重要な位置を占める箇所であるが、「このむとて」の省略された用言は、形式化した意味の「いふ」であり、接続関係からすれば、後件句に「……も・打消」でも明らかかなように逆接となっている。また、「このむ」という動作は心理を表現しており、『古今和歌集』の動詞終止形を承ける「とて」と同様であると思われる(『古今和歌集』〔用例1〕〔用例2〕)。ところが、〔用例19〕は「仲麻呂」という明確なる主体が存しており、聞き手である対者も存していることから、発話の意の「言ふ」の省略であると考えられる。また、引用節の「よむ」はこれまでの心理を表現するものとは性格を異にし、具体的な動作を表現しているものと考えられる(この心理、具体という問題は「枕草子」で詳しく述べる)。ただ、ここで注意を要するのは、〔用例19〕の引用節中が習慣的事象についての言及であることである。

〔用例20〕は風波がおさまらず、楫取の言うがままに神へ奉納し、そのことが残念であるとコメントしている場面である。〔用例20〕の引用節は被修飾語句「うちほめつ」に対して、今現在、実現(顕在化)しようとしている(これを「将然」と仮称する)ことを表わしていると考え、「奉納する」のではなく、「奉納しよう」という動作であ

ると考えられ、この用例は『古今和歌集』の「つかふとて」と同様である。『古今和歌集』でも指摘したが、「用例20」はその性質上、意思と同等の表現性を有しているものであり、注目される。また「いかがはせんとて」は注釈書等では、発話として取り扱っているものも見受けられるが、「むとて」を考察した結果からも明らかのように、この用例も貫之の心中思惟を表していると考えるべきであろう。

一方、名詞、名詞プラス助詞を承ける「とて」の用例も『土佐日記』中に存している。

〔用例21〕元日。なほおなじとまりなり。白散があるもの「よのま」とて、ふなやかたにさしはさめりければ、風にふきならさせて、えのまずなりぬ。 (一月一日 31ペ)

〔用例22〕九日のつとめて、大湊より奈半の泊を追はんとてこぎいでけり。これかれたがひに「国の境のうちは」とて、みおくりにくる人あまたがなかに、(略) ここかしこにおひくる。 (一月九日 35ペ)

〔用例21〕は「あるもの」という明確なる主体が存しており、聞き手という対者は存していないので、「とて」は「とおもひて」の省略と考えられる。それに対して、「用例22」は主体と共に対者をも表現する「これかれたがひに」と明記されていることから、発話の意である「と言ひて」の省略形と考えられる。このように名詞等を承けるものと区別する必要はないのであって、この点、漢文訓読語「として」と相違している。

さて、「既然」を表すものも一例存している。

〔用例23〕(略) かぢとりは、うつたへに、われ歌のやうなることいふともあらず。聞く人の「あやしく。歌めきてもいひつるかな。」とて、書き出だせれば、げに三十字あまりなりけり。

〔用例23〕も貫之の歌論を主張している用例である。楫取が「おの (二月五日 50ペ)

づから」詠んだ(言った)言葉を、「聞く人」が書き出したところ、和歌の音数律と同じであった、と書き記している場面であるが、この用例では「聞く人」という主体と共に、対者をも表現しており、「用例23」は発話の意の「と言ひて」の省略形として「とて」を捉えるべきであろう。

このように『土佐日記』中の「とて」は歌論を主張する主要な場面に等に用いられ、特に「用例15」のように、従来ならば「として」が用いられたであろう箇所にも、「とて」の意味用法を意識して、果敢に仮名文に取り入れた貫之の姿勢を窺い知ることができるのである。

(未完)

注

- ① 『奈良朝文法史』 452ペ以降(初版大9 再版宝文館出版による)
- ② 『あゆみ抄』では「と」の用法中に「とて」を含めており、相違は指摘されていない。
- ③ 『上代語助動詞の史的研究』 973ペ(明治書院 昭48)
- ④ 『万葉集助詞の研究』(笠間書院 昭63)
- ⑤ 『日本文法 文語篇』 106ペ以降(昭29 岩波書店)
- ⑥ 山口佳紀氏は『古代日本文体史論考』(有精堂 平5)で「(略)テはかつて動詞の連用形であり、そのために、クテ・ヅテ・トテ・ニテ・カクテなど連用修飾格に立つ語との連接が可能だったのでないかと考える。」(237ペ)とし、「原初的な語法」と指摘されている。
- ⑦ 屋名池誠氏は「母音脱落」(『女子大文学』43 大阪女子大学国文学科紀要 平4)で「(モフは)すでに脱落形が脱落を生んだ語環境をはなれてそれ自身一個の独立の動詞として機能しているといえる」とし、「オモフ」の語頭母音脱落形モフは前接語の音韻的条件に束縛されていないと指摘しておられる。また、「もふ」が古形であり、「おもふ」は新形ではないかという指摘もある(鶴久氏「上代の借訓仮名と

- 母音脱落現象をめぐって」『萬葉』66 昭43)。
- ⑧ 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東京大学出版会 昭38)。
また、「位相」とは場面論を除いて、属性論に限定するものではなく、社会的属性差と共に文体(スタイル)差を含めるものとして使用している。(真田信治氏「位相という用語について」『国語学』154集 昭63)
- ⑨ 加點意識等、難点が存するが、岩崎本『日本書記』に見られるものを訓点資料中での「とて」の用例として認めて良いのではないかと思われる用例がある。
- ⑩ 『西大寺本金光明最勝王經古點の国語学的研究』137ページ以降(初版昭17 再版勉誠社による)